

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

# カメコ遺跡

県営畑地帯総合土地改良事業（木之香地区）  
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

1993年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

## 序 文

伊仙町は埋蔵文化財が比較的に多く、昭和時代初期に面縄貝塚が発見され、喜念原始墓・大田布貝塚などの先史遺跡をはじめ、中世の文化財として著名なカムィヤキ窯跡群の発見などにより、それぞれ国、県の助成を得てその調査と保護活用がなされ公表してきたところであります。

平成4年度も、県文化課の指導と農地整備課の御理解のもとに国と県の助成を受け町内、大田布のカメコ遺跡の確認調査を県立埋蔵文化財センターに依頼して実施いたしました。

本報告書はその概要をまとめたものでありますが、町民は勿論広く一般に知りたいただくとともに、学術研究の資料として活用されることを願ってやみません。この調査にあたって、文化庁・県文化課・埋蔵文化財センター職員・土地所有者並びに直接作業にたずさわった多くの方々に深く感謝を申し上げます。

平成5年3月

伊仙町教育委員会

教育長 泉 照久

## 報告書抄録

フリガナ	カメコイセキ					
書名	カメコ遺跡					
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業（木之香地区）に伴う埋蔵文化財確認調査報告書					
卷次						
シリーズ名	伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	8					
編著者名	池畠 耕一・大久保浩二					
編集機関	伊仙町教育委員会					
所在地	鹿児島県大島郡伊仙町伊仙2293-1番地					
発行年月日	平成5年3月20日					
フリガナ	カメコイセキ					
所取遺跡名	カメコ遺跡					
フリガナ	カゴシマケンオオシマグンイセンチヨウイヌタブカメコ					
所在地	鹿児島県大島郡伊仙町犬田布カメコ					
調査期間	19920629～19920710					
調査面積	190m <sup>2</sup>					
調査原因	県営畑地帯総合土地改良事業（木之香地区）					
出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
	縄文時代	土坑1	縄文時代	完形壺 土器 磨製石斧 打製石斧 磨石 石皿 クガニイシ 砥石 剥片	1点 パンケー ス5箱 10点 2点 7点 3点 2点 1点 2点	



カメコ遺跡位置図（5万分の1）

## 例　　言

1. この報告書は、伊仙町教育委員会が文化庁及び鹿児島県の補助を得て、平成4年度に実施したカメコ遺跡の確認調査報告書である。
2. 遺跡名は当初『木之香』としていたが、当該地域の字名が異なったため、『カメコ』に改称した。
3. 調査は伊仙町教育委員会が主体となり、発掘調査は鹿児島県教育庁鹿児島県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて担当した。
4. 本書で用いたレベル数値は全て近くのベンチマークから移動した高さを基準とした海拔絶対高である。
5. 遺物番号は全て通し番号であり、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
6. 遺跡及び整理段階での実測・トレース及び写真撮影は池畠・大久保が行った。
7. 本書の執筆分担は次の通りである。  
第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章 第2節、第Ⅳ章  
池　畠  
第Ⅲ章、第Ⅳ章 大久保
8. 出土品は伊仙町教育委員会が保管し、主なものは伊仙町歴史民俗資料館で展示・公開する。

## 目 次

序 文

例 言

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過及び組織 .....	7
第1節 発掘調査に至るまでの経過 .....	7
第2節 発掘調査の組織 .....	7
第3節 発掘調査の経過 .....	8
第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境 .....	10
第1節 遺跡の立地 .....	10
第2節 伊仙町の遺跡 .....	10
第3節 周辺の遺跡 .....	11
第Ⅲ章 発掘調査の概要 .....	14
第1節 調査の概要 .....	14
第2節 各トレンチの調査 .....	14
第3節 今後の措置 .....	40
第Ⅳ章 まとめにかえて .....	41

## 挿 図 目 次

第1図 カメコ遺跡の位置 .....	10	第10図 22トレンチ出土の土器 .....	20
第2図 周辺の遺跡分布図 .....	13	第11図 5トレンチ・24トレンチ 断面図 .....	21
第3図 1トレンチ・2トレンチ 断面図 .....	14	第12図 5トレンチ出土の土器 .....	22
第4図 トレンチ配置図 .....	15	第13図 5トレンチ出土の石器 .....	23
第5図 3トレンチ・4トレンチ 断面図 .....	16	第14図 6トレンチ・7トレンチ・ 18~21トレンチ・25~27 トレンチ断面図 .....	25
第6図 3トレンチ・4トレンチ 出土の土器 .....	17	第15図 10トレンチ・11トレンチ 断面図 .....	26
第7図 4トレンチ出土の土器 .....	18	第16図 10トレンチ・13トレンチ 出土の土器 .....	27
第8図 4トレンチ出土の石器 .....	20		
第9図 22トレンチ断面図 .....	20		

第17図	10・11・15トレンチの配置図と土坑	28	第22図	表面採集の石器（1）	34
第18図	土坑出土の土器	29	第23図	表面採集の石器（2）	35
第19図	8トレンチ・9トレンチ、12～17トレンチ断面図	30	第24図	表面採集の石器（3）	36
第20図	13トレンチ出土の石器	31	第25図	表面採集の石器（4）	38
第21図	表面採集の土器	32	第26図	表面採集の石器（5）	39
			第27図	包含層残存区域	40

## 図版目次

図版 1	近 景(1)	図版 7	5 トレンチ・
図版 2	近 景(2)		表面採集の土器
図版 3	5 トレンチ	図版 8	土坑・10・13・22
図版 4	20トレンチ 出土状況など		トレンチ出土の土器
図版 5	土 坑	図版 9	石 器(1)
図版 6	3 トレンチ・4 トレンチ 出土の土器	図版10	石 器(2)
		図版11	石 器(3)
		図版12	石 器(4)

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過及び組織

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地整備課・徳之島土地改良出張所）は、大島郡伊仙町木之香地区の県営畑地帯総合土地改良事業を計画し、実施計画地域内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会（文化課）に照会した。

これをうけて、平成2年4月、文化課で当該地区的分布調査を実施したところ、工事実施予定地区内で木之香・下島権・アマングスク・天城の4か所に散布地が確認された。

この結果に基づき、農地整備課（徳之島土地改良出張所）、文化課、伊仙町教育委員会の間で事業の推進と埋蔵文化財の保護に係る協議が行われ、まず平成4年度に国・県の補助を得て、木之香散布地の調査をすることになった。調査は伊仙町教育委員会が主体となって、遺跡の範囲・性格を確認するための発掘調査を鹿児島県立埋蔵文化財センターに依頼して実施した。

### 第2節 発掘調査の組織

調査主体 伊仙町教育委員会

調査責任者 タ 教育長 泉 照久

調査事務担当者 タ 社会教育課長 前元高徳（10月20日まで）

タ タ 勇 宗夫（10月21日から）

タ 社会教育主事兼課長補佐 中山忠良

タ 派遣社会教育主事 川畠実道

タ 主事 上木正人

タ 社会教育指導員 義 憲和

発掘調査担当者 県立埋蔵文化財センター 文化財主事 池畠耕一

タ タ 研究員 大久保浩二

発掘調査作業員 西田望、岩井純夫、寺本源志、佐藤公安、木場栄造、林忠正

前田了、佐藤芳藏、林文一郎、水本ミヤ子、水本ミチ子

岩井吉江、田中マツ、寺本フサ子、稻里ヨシ子、谷村泰イ子

谷村フミ子、佐藤シゲ子、大郷久枝、長田美江子、林美代子

稻里初子、上木イワエ、芳倉淑子、中村トミ子、福キミ子

伊集院君江、浜田良子、泉トシ子、松野久江

整理作業員 松元雅子、木田安枝、竹下淳子、前田夕起子

なお、調査企画等に関し、県教育庁文化課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

### 第3節 発掘調査の経過

町教育委員会は作業員採用など調査の準備を6月25日から始めた。

発掘調査は、平成4年6月29日から平成4年7月10日まで実施し、その後県立埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成作業を行った。

#### 日誌抄

6月25日（木） 曇り時々雨

作業員募集のため区長宅訪問。

6月26日（金） 曇り

ユンボ借入の交渉

6月27日（土） 曇り

発掘用具チェック及びプレハブ借用交渉。

6月28日（日） 曇り

発掘用具を現地へ搬入。

6月29日（月） 雨

空路 徳之島到着。

遺跡で、トレーンチ位置などを検討。発掘用具を準備。

教育委員会へ挨拶に行く。

6月30日（火） 曇りのち晴

テント設営。プレハブ設置。作業員に発掘調査にあたっての留意点を説明。周辺に多量の遺物が散布していたため、これを採集する。

2トレーンチから7トレーンチを設定し、掘り始める。2トレーンチ・4トレーンチは表土はぎ。3トレーンチの盛土の下は明茶褐色土。写真撮影、実測。5トレーンチの表土下はぎっしりつまつた包含層。6トレーンチの表土下は明茶褐色だが、出土品はない。7トレーンチは表土が深い。

道路脇のベンチマーク(56.409m)からレベル移動。

南海日日新聞社取材。

7月1日（水） 曇りのち晴

1トレーンチ・2トレーンチ・7～9トレーンチ・11トレーンチの表土の下は赤土である。

4トレーンチの表土下には包含層がある。10トレーンチの表土下も赤土であるが、部分的に包含層が残っている。12トレーンチ表土はぎ。

大島新聞社取材。

7月2日（木） 晴れたり曇ったり

4トレーンチの清掃、写真撮影。6・7・9トレーンチの壁面実測。9トレーンチは写真撮影。12・16・18・19トレーンチの盛土あるいは表土の下は赤土、珊瑚。13・14トレーンチは盛土が厚い。15トレーンチの赤土の中に黒色土の落ち込みがあり、字宿上層式土器の完形品が入っている。17

トレンチの表土はぎ。20トレンチには包含層が存在。21・22トレンチの土手の断面清掃。

遠景の写真撮影。レベル移動。

見学者が多い。

7月3日（金） 曇り

10トレンチの包含層の落ち込みを掘り下げる。13・14・17トレンチの掘り下げをしたが、盛土の下は包含層がなく赤土が出ている。23トレンチは道路部分に設定し、ユンボで掘り下げたが、敷石の下は珊瑚だったため、写真撮影し、埋め戻し。15、17～20、22トレンチの写真撮影。4・9・14・16・22トレンチの断面実測。1～4トレンチ、5～7トレンチ付近の平板測量。一部埋め戻し。

7月4日（土） 晴

犬田布小学校文化財少年団20名見学会。

7月6日（月） 雨

雨のため外の作業中止。

7月7日（火） 雨

雨のため外の作業中止。

徳之島土地改良出張所へ発掘調査結果報告。今後の計画等を聞く。

歴史民俗資料館で考古資料調査。

7月8日（水） 晴時々曇り

15トレンチ土坑出土の壺を実測し、取り上げる。その下にまた壺があったがそのまま置く。

20トレンチを拡張し、包含層の広がりをつかむ。27トレンチでは表土の下が赤土や珊瑚。12・14・20・21・24・25トレンチの写真撮影。12・17～21・25・27トレンチの断面実測。

各トレンチの位置を図面に入れる。

7月9日（木） 曇り

仕上げにかかる。

5・13・15・26・27トレンチの清掃、写真撮影。5・13・15・24・26トレンチの断面実測。

17・26・27トレンチの位置を図面に入れる。

実測まで終わったトレンチは埋め戻し。

7月10日（金） 晴

トレンチの埋め戻し。

道具の清掃、片付け。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の立地

伊仙町のある徳之島は、薩摩半島から南へ約500kmの所にある奄美諸島の一つで、奄美大島と沖永良部島の間に位置する。島の面積は約248km<sup>2</sup>で、中央部に標高645mの井之川岳を主峰とする花崗岩の山地が東北部から南西方向に向かって延びている。この中央の山地を取巻くように、海岸に向かって緩やかに傾斜した段丘が広がり、標高約200m付近を境として、山地と隆起珊瑚礁に大別される。島の南部は、隆起珊瑚礁が発達して、広大な海岸砂丘を形成している。海岸線は島の西岸がほとんど20~100mほどの断崖で海に落ち込んでいるのに対し、島の東岸はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚礁が発達している。

遺跡の所在する伊仙町は、徳之島の南西部に位置し、北東は徳之島町、北西は天城町に隣接している。町の北東部にある標高417.4mの犬田布岳から、山地やその裾野が緩やかに南へ傾斜して平坦地となり、砂丘や珊瑚礁が発達した海岸線となっている。隆起珊瑚礁の上の覆土は



第1図 カメコ遺跡の位置

薄く、赤土が大雨によって流されることも多い。

本遺跡は伊仙町の北西端近くにあり、北西約3kmには珊瑚の断崖が美しい景勝地として有名な犬田布岬がある。遺跡は伊仙町犬田布のカメコと宮川にまたがっている。山地から南へ緩やかに下降してきた台地の端部近くにあり、海岸線まで約500mある。東側には浅くて狭い谷が入り込んでいる。台地一帯はほとんど開墾され、サトウキビあるいは飼料などの畑となっており、遺跡の北側は集落が形成されている。台地の覆土は薄くあちこちに隆起珊瑚礁の露頭がみられる。

### 第2節 伊仙町の遺跡

伊仙町は、徳之島の中でも遺跡の多い所で、その大半は、南部の海岸沿いに集中している。しかし、近年では、地元研究者の精力的な努力に

より内陸部での遺跡の発見も報告されている。

縄文時代の貝塚として喜念貝塚、面縄貝塚群、犬田布貝塚などがあり、これらは古くから調査され多くの出土品が出ている。いずれも隆起珊瑚礁の横に開いた岩陰あるいはその前部に生活跡を残すもので、後期から晩期にかけての遺跡である。

喜念貝塚は宇宿上層式土器を主体とするが、他に宇宿下層式土器なども出ており、喜念式土器（後期）の標式遺跡としても知られる。

面縄貝塚群は4つの貝塚によって構成されており、それぞれ面縄第1～第4貝塚と呼ばれている。かなり長期にわたる貝塚群で、前期から晩期にわたっており、多種の石器、貝製品、骨製品などが出ている。ここから出土した土器は面縄東洞式土器、面縄前庭式土器などと呼ばれ、縄文土器の標式遺跡にもなっている。

この他にも東面縄貝塚、ヨツキ洞穴、喜念上原遺跡などの縄文時代遺跡がある。ヨツキ洞穴は海岸線から約2.2km内陸部に入った台地端に開口した洞穴で、昭和60年に調査されている。ここも室川下層式土器（前期）から宇宿上層式土器まで長期にわたる各種の土器が出ており、サメ齒製垂飾品、貝玉・貝鏡等の貝製品の他、魚骨・動物骨・自然貝なども出土している。

弥生時代～古墳時代の遺跡としては喜念原始墓・喜念クバンシャ岩陰墓・佐弁貝塚・面縄第1貝塚・面縄第3貝塚・ヨツキ洞穴などが知られている。喜念原始墓・喜念クバンシャ岩陰墓では多くの人骨が発見されており、南西諸島特有の抜歯風習をしていることで知られている。近くでは貝札や貝輪なども発見されている。面縄第1貝塚では残りの良い人骨を伴う箱式石棺墓も見つかっている。これら弥生時代の遺跡では南西諸島特有の土器とともに、九州本土系の土器も出土している。また面縄第3貝塚は兼久貝塚とも呼ばれているが、ここから出た弥生時代～歴史時代の土器は兼久式土器といわれ、南西諸島での標識遺跡となっている。

軟質の須恵器がトカラ列島から沖縄諸島にかけて発見されているが、この須恵器を焼いた窯が伊仙町にある。海岸線から約4.5km山地に入ったカムイヤキ古窯跡群と、ヤナギタ古窯跡群である。このうちカムイヤキ古窯跡群は昭和59年に発掘調査がされ、12基の窯跡と灰原が確認されている。調査された窯は長さが3.6～8.4mあり、焼成部の角度は31度～42度もある急傾斜の登り窯である。壺・壺・鉢・碗などを焼いており、12～13世紀頃のものだといわれている。これらの窯跡群と海岸線との間には、須恵器や陶・磁器などが大量に採集されているミンツキ遺跡があり、古代から中世の集落遺跡として知られている。中世の城跡として、完形の青磁碗12点が工事中に発見された面縄按司城（ウガンウスジと呼ばれている）がある。また近世から現代の墓地であるトフル墓も、町内各地の隆起珊瑚礁の岩陰部や洞穴内には残っている。

### 第3節 周辺の遺跡

カメコ遺跡周辺にも多くの遺跡が存在している。

縄文時代の遺跡として先にも紹介した犬田布貝塚がある。ここは昭和58年に発掘調査がされ、隆起珊瑚礁の洞穴とその前部から多くの出土品が発見された。

土器は面縄西洞式系統の土器、喜念 I 式、字宿上層式などが出でおり、河口貞徳氏は面縄西洞式系統の土器を犬田布式土器と呼んでいます。<sup>(注1)</sup> 土製品として土製円盤が出ている。石器には磨製石斧・打製石器・磨石・敲石・凹石・石皿などが出てている。貝製品には刃器（貝刃・蝶貝製貝斧・スイジガイ製利器）、刺突具、鎌、容器、匙、貝輪、垂飾品、鍤、釣針などがある。骨製の利器・垂飾品もある。他にも石あるいは鹿角の垂飾品、かんざし、耳栓、糞石など多種のものが出ており、徳之島の縄文人の生活を想像するには格好の遺跡となっている。

犬田布貝塚のある谷の周辺には弥生時代から中世に統くいくつかの遺跡が知られている。アジマー B 遺跡・アジマー遺跡・犬田布記念碑遺跡などである。特にアジマー B 遺跡は広い範囲に青磁などが散布している。

また、海岸線近くでも遺跡が知られる。犬田布貝塚と同じような立地をしている前泊西貝塚では弥生時代の土器などが採集されている。下島権遺跡・天城遺跡では縄文時代から歴史時代の、アマングスク遺跡では弥生時代の遺物が採集されている。

妙巖接司城跡にはトフル墓などが存在している。犬田布貝塚の隣接地にもトフル墓がある。

図番	遺跡名	所在地	地形	時代	出土品	文献
1	妙巖接司城跡	犬田布字明眼	山地			
2	アジマー B 遺跡	タ	台地	中世	青磁	
3	アジマー遺跡	タ	沖積地	弥～中世	弥生土器・須恵器・青磁	
4	犬田布貝塚	タ字連木 芋	谷・珊瑚 洞穴	繩～弥	面縄西洞式・字宿上層式・ 石器・貝器・骨器など	参文 1
5	犬田布記念碑遺跡	タ	沖積地	弥生	弥生土器・石器	
6	前泊西貝塚	タ西犬田 布	谷・珊瑚 洞穴	弥生	弥生土器・チャート	
7	カメコ遺跡	タカメコ	台地	縄文	縄文土器	
8	下島権遺跡	阿権太野	台地	繩～歴		
9	アマングスク遺跡	タ木之香	谷	弥生	弥生土器	
10	天城遺跡	タ太野		繩～歴		

(注1) 河口貞徳『日本の古代遺跡 38 鹿児島』 1988

#### 《参考文献》

- 吉永正史・宮田栄二他『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984
- 新東見一・青崎和憲他『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
- 吉永正史・牛ノ浜修他『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1985
- 新東見一・青崎和憲他『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1985
- 牛ノ浜修・井ノ上秀文『ヨヲキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1986
- 立神次郎・長野真一『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1988



第2図 周辺の遺跡分布図（2万5千分の1）

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 第1節 調査の概要

遺跡は南西に伸びる舌状台地の基部に立地している。対象地の北西隅付近を最高所として、東へあるいは南へ向かって下降している。調査は約30000m<sup>2</sup>の範囲を対象に、28か所のトレンチを設定して行った。トレンチの広さは2×5mを基本としたが、場所によって拡張したり縮小した。また段下げした畑の土手を利用したものもある。調査面積は190m<sup>2</sup>である。

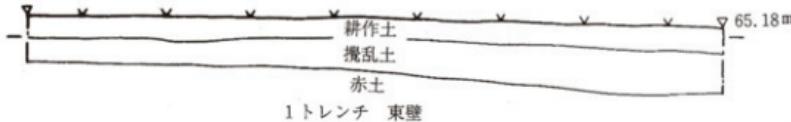
対象地域の大部分は成長したサトウキビ畑であり、天地返しされた畑や、削平により段々になった畑が多い。特に道路より東側は、天地返しをして表面に珊瑚の小礫が散布している赤土の畑が多くみられた。東側に設定したトレンチでも、表土の下は赤土または珊瑚であった。

道路より西側には遺物の散布している畑があり、特に3・4・22トレンチを設定した畑と、5・6・7トレンチを設定した畑には遺物が多くかった。土器片を1389点、石器を26点表探している。それらの畑では最初いれた4トレンチ・5トレンチから遺物が出土したため、包含層の広がりを確認するために周辺に密にトレンチを設定して調査した。その結果、削平を受けているところが多かったが、20トレンチからも遺物が出土し、狭い範囲であるが包含層が残っていることが分かった。また10・11・15トレンチからも遺物が出土し、特に15トレンチで発見された土坑からは完形の壺形土器が出土した。

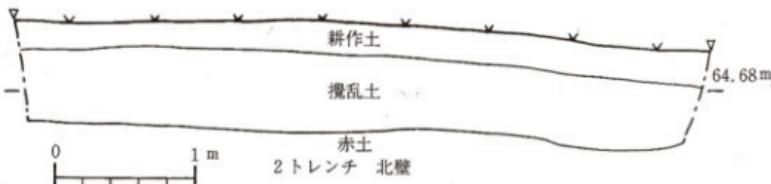
### 第2節 各トレンチの調査

#### 1. 1トレンチ (2×5m)

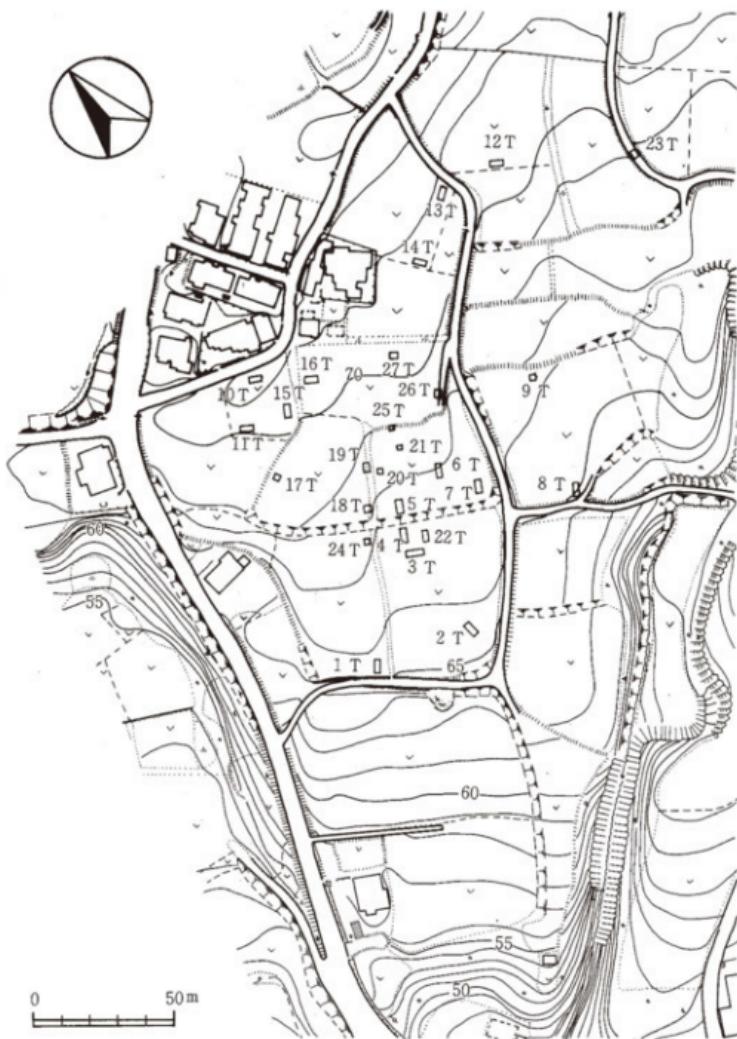
1トレンチは舌状台地の中央付近、確認調査範囲の最も海側に設定した。ここより東・南側は段落ちとなっている。耕作土の下は赤土（明茶褐色粘土）まで天地返しされ、珊瑚の小礫を多く含んだ搅乱土が堆積していた。天地返しの深さは約50cmである。遺構・遺物とも発見されなかった。



1トレンチ 東壁



第3図 1トレンチ・2トレンチ断面図



第4図 トレンチ配置図

## 2. 2トレンチ (2×5m)

2トレンチは1トレンチと同じ高さの塙に設定した。耕作土の下は赤土まで天地返しされていた。搅乱土の下は赤土であり、天地返しの深さは約80cmである。遺構・遺物とも発見されなかった。

## 3. 3トレンチ (2×6m)

### (1)概要

3トレンチ周辺では表面に多くの土器片が散布していた。表探品は一括して後述する。このトレンチでも深さ約70cmまで天地返しを受けていた。耕作土の下は搅乱土、赤土である。耕作土中から25点の土器片が出土した。

### (2)遺物

#### ①土器 (第6図1~3)

1~3は耕作土からの出土である。いずれも表面の磨滅がひどく、内外とも調整法は不明である。1は口縁部が肥厚するもので、口縁端に細かいヘラによる斜め刻み、その下にヘラ沈線がみられる。淡茶褐色を呈し、焼成は不良である。細かい黄色の石を多く含んだ砂質土を用いている。2は外耳土器である。弧状となる貼付突帯がみられる。外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈し、焼成はやや不良である。黄色石・石英などの細かい石を多く含む砂質土を用いている。3は口縁下に貼付突帯を有するものである。明茶褐色を呈し、焼成は不良である。白色石の細粒を多く含む砂質土を用いている。

## 4. 4トレンチ (2×5m)

### (1)概要

4トレンチ周辺は特に多量の遺物が散布しており、耕作土の色も他の赤土混じりの茶褐色であるのに対し、黒褐色であった。耕作土と搅乱土を掘り下げる多量の土器片が出土した。更にその下が遺物を多く含む黒色粘質土となり、遺物包含層と認められた。包含層上面は平坦ではなく、北から南へ下るなだらかな傾斜があった。地表から遺物包含層まで約50cmの深さである。耕作土・搅乱土から875点の土器と2点の磨製石斧片、包含層から



第5図 3トレンチ・4トレンチ断面図

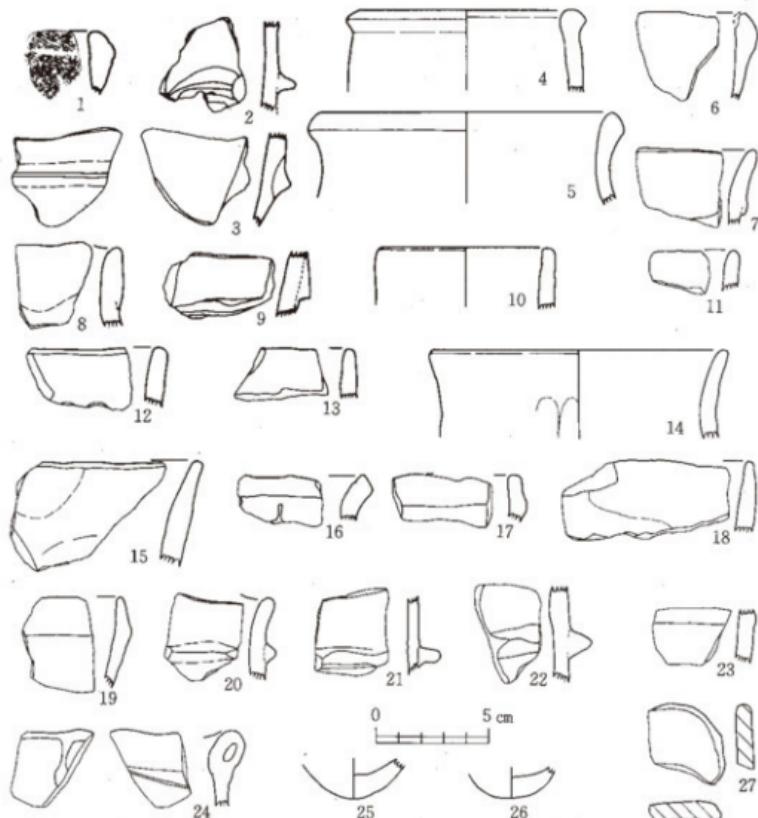
579点の土器片が出土している。

(2) 遺物

① 土器 (第6図・第7図4~58)

いずれも表面の磨滅がひどくて、ほとんどのものは調整法がはっきりしない。

4~27は包含層から出土したものである。4~9は口縁部が肥厚する土器である。4は口縁直径が10.5cmある玉縁口縁の土器で、内面はヘラナデで仕上げている。5は口縁直径が14cmの玉縁口縁で、口縁部がわずかに外反している。7~9は幅の広い貼付口縁をもつもので、8の口縁は波状を呈している。10~13は口縁がまっすぐ伸びる土器である。



第6図 3トレンチ・4トレンチ出土の土器



第7図 4トレンチ出土の土器

10は口縁直径が8cmと小形である。14~16は外反したり、外へ開くものである。14は口縁直径が13cmあり、外面はヘラナデで仕上げている。16は口縁端が直角に折れて面をもつもので、外面には突起らしきものがあり、貼付文様のある可能性がある。

17は口縁端部がやや肥厚している。18は口縁端近くがやや薄くなっている。19は外へ開きながらまっすぐ伸びるが、端部近くで内側へ屈曲するもので、内面はヘラナデで仕上げている。

20~23は貼付突帯を有するもので、20は波状口縁となる。21の内面、22の内・外面はヘラナデで仕上げている。

24は外反する低い波状口縁で、突起部分に把手がみられる。

25・26は小さい丸底である。27は直径5~6cmほどの土製円盤である。

28~58は表土から出土したものである。28~38は口縁部が肥厚する土器である。29は口縁直径8cmと小形で、肥厚部に縱方向のヘラ沈線がみられる。30は外面にヘラナデの痕がみられる。33は口縁の肥厚部が矩形に近いもので口縁直径が20cmある。

39~45は開きながらあるいは直立してまっすぐ伸びる口縁をもつもので、39の外面は斜方向のヘラナデで仕上げている。40・43は波状口縁となる。

44・46は口縁近くで外反して、外へ開きながらまっすぐ端へ立ち上がるもので、波状口縁となる。

47は口縁部が内弯するもので波状となる。

48~53は口縁下に貼付突帯のあるものである。50は口唇部がややくぼんでいる。53は外耳土器で弧状に突帯がまわっている。

54は口縁直径が10cmの小形波状口縁の土器である。やや外反する口縁部をしており、4条の細沈線と羽状沈線とがみられる。

55~57は底部であるが、丸底と平底とがある。

58は口縁端部が強く内弯する鉢形土器で、外面はくぼみがあつて段をなしている。内面は丁寧なヘラナデで仕上げている。他の土器と違い、黄色石・石英・雲母・白色石・茶色石・青灰色石など4mm大のものもある割に粗い土を使用している。

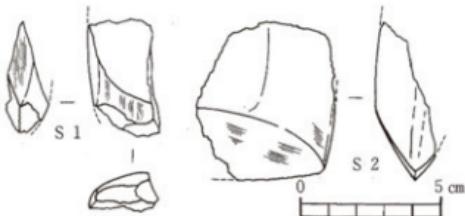
色は茶褐色・淡茶褐色を主体とした色をするものが多いが、暗茶褐色、黄色っぽい青灰色、黄みがかった淡茶褐色、うすい灰褐色、灰がかった淡茶褐色、淡黒褐色のものもある。焼成度はあまり良くないが、8・15・18・39・40・42・55などは良好である。しかし、良いものも包含層の土のせいか剥脱が目立つ。胎土には黄色石が多く混ざった細かい土を使用しており、他に白色石・茶色石・石英・青灰色石なども含まれている。この他に黄色石が少なくやや粗い土を使用したものもある。8・9・20・27には4~5mm大の石も含まれている。

## ②土製品（第7図59）

59は直径3.3cmの整然とした円形を呈する円盤形土製品である。磨滅がひどい。

③石器（第8図S1・S2）

S1とS2は表土からの出土であり、ともに磨製石斧の刃部破片である。S1は輝緑岩製で小破片のため全体の形状は不明であるが、刃部近くと思われる。S2は蛇紋岩製で研磨により鋭い刃部を作出している。刃先には使用による細かいつぶれが観察される。残存する刃部は3.2cmである。



第8図 4トレンチ出土の石器

5. 22トレンチ (2×4 m)

(1)概要

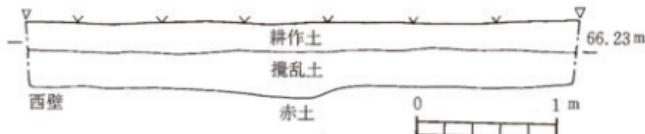
22トレンチは4トレンチで発見された遺物包含層の広がりを確認するために、4トレンチの東側に15m離して設定した。しかし耕作土中には土器がみられたものの、赤土まで天地返しされており、遺物包含層は確認出来なかった。天地返しの深さは約50cmで、赤土には多くの珊瑚が含まれていた。耕作土・搅乱土から94点の土器片が出土している。

(2)遺物（第10図、60-66）

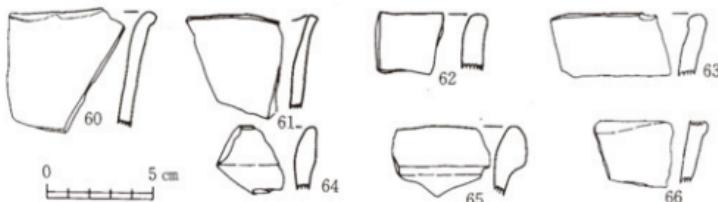
いずれも耕作土からの出土で、磨滅して表面の整形法は不明である。

60・61は器厚が薄く、外へ開きながらまっすぐ伸びるもので、端部は断面が矩形を呈し、61は波状口縁となる。

62は逆に部厚いもので、他の土器が黄色石を多く含んだ微石粒を使用しているのに対して、黄色石・白色石・石英の細かい石の多い砂質土を用いている。63は口縁端近くの内面



第9図 22トレンチ断面図



第10図 22トレンチ出土の土器

が肥厚する。64・65は端部が肥厚する土器である。66は口縁下部に突帯のある土器である。60は焼成良好であるが、他はやや不良、あるいは不良である。

#### 6. 24トレンチ (2×2 m)

24トレンチは遺物包含層の西側への広がりを確認するために設定した。しかし、ここも赤土まで天地返しされていた。天地返しの深さは約50cmである。遺構・遺物とも発見されていない。

#### 7. 5トレンチ (2×5 m)

##### (1)概要

5トレンチは4トレンチのすぐ上の段の畝に設定した。段の高さは1.2mある。耕作土は淡い黒褐色粘質土であり、その下には黒褐色粘質土と濁茶褐色粘土の混ざった層が堆積していた。この層はトレンチの南側ではなく、北側に向けて堆積している。トレンチ北隅で約15cmある。その下に濁茶褐色粘質土があり、多数の遺物が発見された。この遺物包含層を約20~30cm掘り下げると、一部はやや黒っぽい色になるところもあった。また10~15cmの疊も数個検出された。この面で遺物の出土状況を写真に記録し、そのまま埋め戻した。

##### (2)遺物

###### ①土器 (第12図67~98)

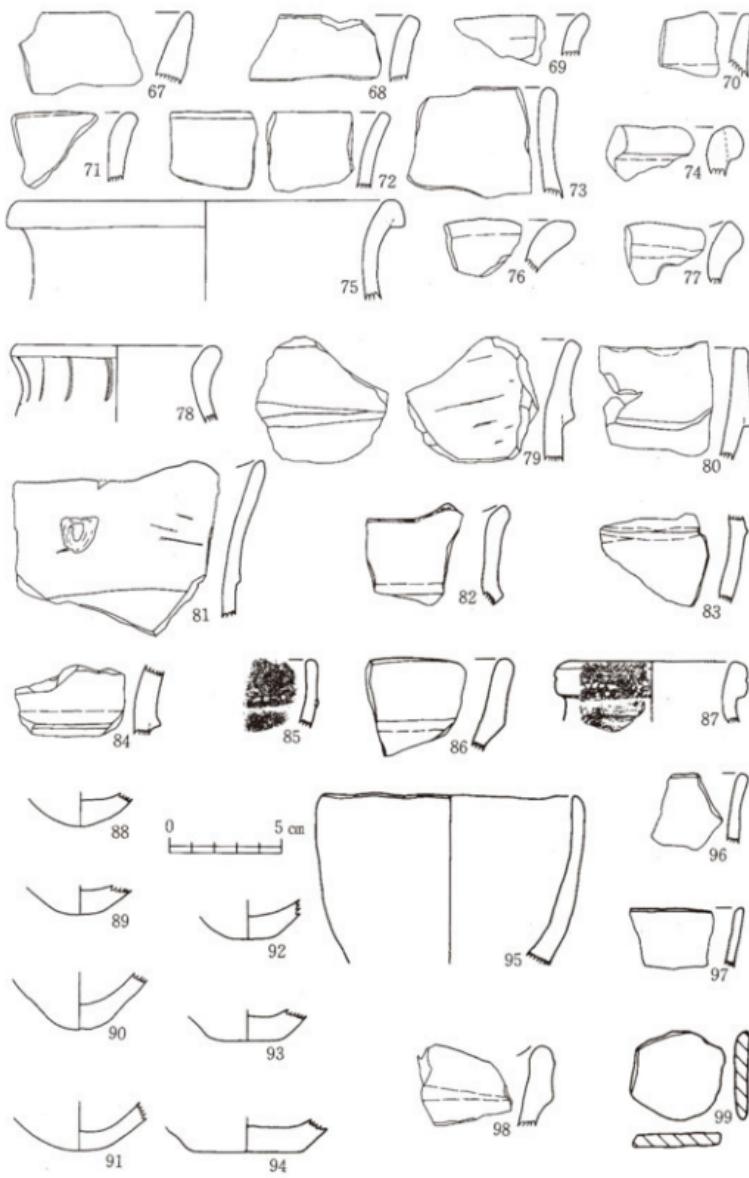
67~95は包含層から、96~99は耕作土から出土したものである。ほとんどの破片が表面の磨滅がひどくて調整痕が不明である。

67~73はやや外反しながら口縁端へ向かうものである。端部は矩形を呈するものと、丸みをもつものとがある。67は部厚い口縁部で、端部がやや細くなる。70は波状口縁となる。

74~81は端部近くが粘土貼付によって肥厚するもので、玉縁状のもの(74~78)と、幅広くなるもの(79~81)とがある。74は丸い玉縁となる。75は口縁直径が18cmある。77は波状口縁となる。78は口縁下部に突帯風の突起が縦方向へ平行に貼付られている。79は外面がヘラによる丁寧な横ナデ、内面がヘラの横ナデで仕上げ、口縁がへこむことから貼付突帯の可能性がある。80は貼付部を丁寧にナデており、境がはっきりしないが、明瞭な



第11図 5トレンチ・24トレンチ断面図



第12図 5 トレンチ出土の土器

段になっている。81は段になっているが、肥厚部は厚くない。表裏とも横方向のヘラナデで仕上げており、波状口縁となる。

82~84は口縁部が外反し、その下に三角形の貼付突帯が付されるものである。82は突起部を有するもので、外面はヘラナデで仕上げる。

85は口縁がやや内反するもので、外に刺突文のある低い貼付突帯が付される。小形の深鉢である。86は外へ開きながら端部近くで屈曲して立ち上がるるもので、内外とも丁寧なナデ仕上げである。

87は口縁端部が矩形に肥厚する壺形の土器で、肥厚部に細かい刺突文が、その下に左下がりの細いヘラ沈線がみられる。外面はヘラによる丁寧な横方向のナデ、内面はヘラによる横方向ナデで仕上げている。

88~94は底部である。88~91が丸底、92が平らな面をもつ丸底、93・94が小さな平底である。94はいびつな円形をしており、丁寧にナデしている。

淡茶褐色・茶褐色・黄褐色・黒褐色を呈しており、80・83・86以外の焼成度は良くない。黄色石の微粒石を多く含んだ細かい粘土を用いたものが多い。68・72・73・75・77・79・82~84・92などは黄色石・白色石・青灰色・石英・雲母などの細礫を多く含む砂質土を用いている。94は特にやや粗い土を用いている。

95は口縁直径が12cmほどの鉢で、口縁端はでこぼこしている。外面は丁寧なヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈し、焼成度はやや不良である。黄色石の微石を多く含み、他に青灰色石・石英などの微石も含んでいる。

96・97は細い小形の土器である。98は口縁端が肥厚するもので、波状の口縁である。最も高くなる部分の口唇部には刺突痕らしきものもみられる。

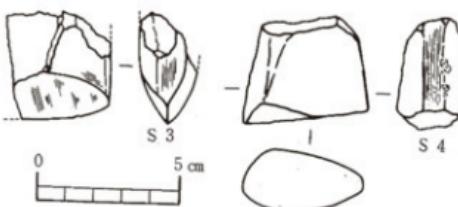
茶褐色、あるいは淡茶褐色を呈し、焼成度は良くない。黄色石の微石が多く他に石英・雲母などの入った細かい胎土を用いたものと、黄色石・茶色石・青灰色石などの細かい石を多く含む砂質土を用いたもの(97)とがある。

### ②土製品（第12図99）

99は直径が約4cmの円盤形土製品で、周辺は打欠いているだけである。

### ③石器（第13図S3・S4）

S3は表土から出土した磨製石斧片である。刃部のみで全体の形状は不明であるが、刃部は両側から研磨され鋭い刃先を研ぎ出している。側面も丁寧な研磨で仕上げられている。残存する刃部は3.2cm、最大厚は2.1cmで、輝



第13図 5 トレンチ出土の石器

緑岩製である。S 4 は包含層から出土した磨製石斧の剣部である。最大厚は中央ではなく、一方に片寄っている。最大厚は2.2cmで、薄いほうの側面は研磨で約5mm幅に面取りされている。砂岩製である。

8. 6トレンチ (2×5m)

6トレンチは遺物の多く散布している畠の中央に設定した。耕作土の下は赤土になっており、遺物包含層は確認出来なかった。トレンチ北側の赤土を約80cm掘り下げたが、厚く堆積していた。遺構・遺物とも発見されていない。

9. 7トレンチ (2×5m)

7トレンチは下の畠との境近くに設定した。下の畠とは1m近い段差があるが、畠の造成の際に切り盛りされたらしく、トレンチでは盛土が厚く(約60cm)、その下は赤土になっていた。遺構・遺物とも発見されていない。

10. 18トレンチ (1×2.4m)

18トレンチは西側のサトウキビ畠との段差部分を利用してトレンチとした。搅乱土の下は黄茶褐色土が約30cm堆積していたが、遺物は含まれていなかった。黄茶褐色土にはマンガン粒を含んだ褐色の斑点模様がある。その下は白い珊瑚と赤土であった。5トレンチの遺物包含層の広がりは確認出来なかった。遺構も発見されていない。

11. 19トレンチ (1×1.6m)

19トレンチも西側のサトウキビ畠との段差部分を利用してトレンチとした。搅乱土の下は暗茶褐色土が約20cm堆積していたが、遺物は含まれていなかった。その下は赤土である。遺構も発見されていない。

12. 20トレンチ (1.5×1.5m)

20トレンチは耕作土を約20cm掘り下げるとき黒褐色土となり、多量の遺物が包含されていた。5トレンチの遺物包含層の広がりと思われる。遺物は上面だけ検出し、写真で出土状況を記録した後、埋め戻した。

13. 21トレンチ (2×2m)

21トレンチでは耕作土の下は赤土になっており、遺物包含層は確認出来なかった。

14. 25トレンチ (1×1.2m)

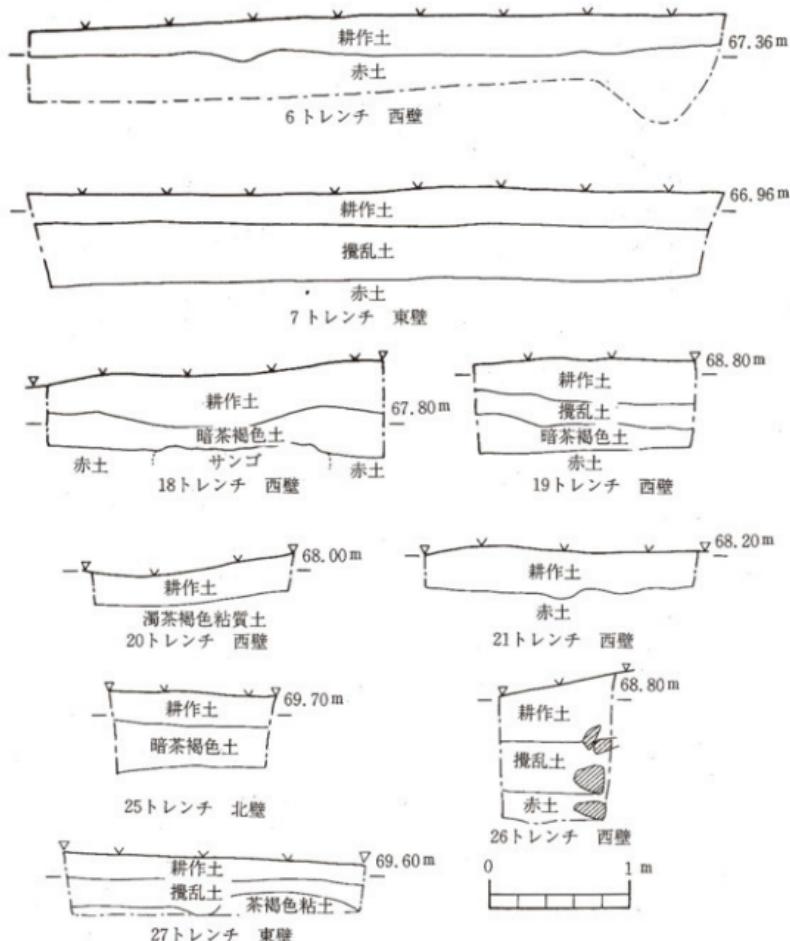
25トレンチは北側のサトウキビ畠との段差部分を利用してトレンチとした。耕作土の下は赤いマンガン粒を含んだ暗茶褐色土が約30cm堆積していたが、遺物は包含されていなかった。その下は赤土となっている。

15. 26トレンチ (1×1m)

26トレンチは25トレンチと同じサトウキビ畠の土手を削り、土層を確認した。耕作土の下には明茶褐色土・濁灰褐色土・黒色土の混ざった固い粘土層が約40cm堆積していた。20~30cmの大きな礫も混入しており、二次的な堆積のようである。遺物は包含されていない。その下は赤土である。

16. 27トレンチ (2.2×2 m)

27トレンチは遺跡のほぼ中央に設定した。耕作土の下は淡い黒褐色粘土の盛土であり、その下は茶褐色粘土、赤土と続く。深さ約40cmで珊瑚が出てきた。耕作土から土器7点が出土している。



第14図 6トレンチ・7トレンチ・18~21トレンチ・25~27トレンチ断面図

## 17. 10トレンチ (2×5 m)

### (1)概要

10トレンチ付近は遺跡西側で、なだらかに上がる斜面の最も高い部分に当たる。畠には遺物が散布していた。10トレンチを掘り下げるとき耕作土の下はすぐ赤土になっていたが、部分的な浅い凹みに黒褐色の包含層が残存しており、土器片が発見された。遺物は取り上げず、写真で出土状況を記録した後埋め戻した。包含層まで約30cmの深さである。遺構は発見されていない。

### (2)遺物 (第16図100~105)

100~102は口縁部が玉縁状にふくらむ土器で、100が黄色がかった淡茶褐色、101・102が明茶褐色を呈する。100・101は黄色石・白色石・石英などの細石粒を多く含む砂質土、102が黄色石の微石の多い細かい土を用いている。いずれも焼成度は不良かやや不良で、表面の磨滅がひどい。

103・104は貼付突帯を有するもので、淡茶褐色あるいは茶褐色を呈する。黄色石・白色石・石英などの微石を多く含む土を用いており、焼成度は良好だが表面の磨滅がひどい。

105は平底に近い小さな丸底で、外面は丁寧なヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈し、焼成は悪い。黄色石・石英などの細石を多く含む砂質土を用いている。

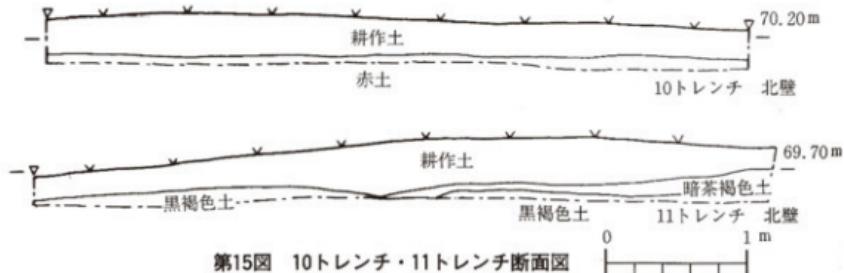
## 18. 11トレンチ (2×5 m)

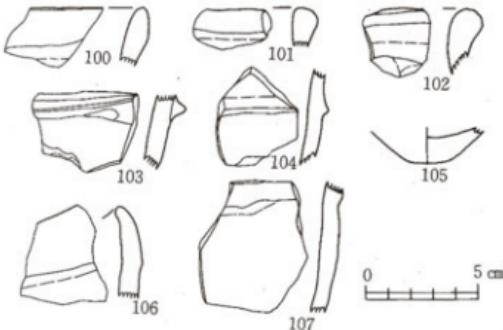
11トレンチでは耕作土の下に暗茶褐色土層と黒褐色土層があり、土器片も発見された。起伏があるようで一部には赤土も出ている。黒褐色土層が包含層と考えられ、遺物は取り上げず、写真で出土状況を記録した後埋め戻した。遺構は発見されていない。包含層まで20~30cmの深さである。

## 19. 15トレンチ (2×4 m)

### (1)概要 (第17図)

15トレンチは10・11トレンチの包含層の広がりを確認するために設定した。南に向かってやや傾斜しており、耕作土を30~40cm掘り下げるとき褐色の斑点模様のある黄褐色土になった。上面を精査するとトレンチの南側に、黄褐色土層に掘り込まれた土坑が発見された。





第16図 10トレンチ・13トレンチ出土の土器

に期することとし、ここまで検出状況の実測図と写真的記録を取り、シートをかぶせて埋め戻した。全面調査の際には土器を固める薬剤等を準備して臨む必要がある。土坑の埋土は固く締まった黒褐色土で、赤いマンガン粒が含まれていた。掘り込まれた黄茶褐色土にもマンガン粒が含まれており、褐色の斑点模様があった。土坑の検出面は地表から40cmの深さである。

#### (2) 遺物（第18図108）

108は口縁部がやや外反する壺形の土器である。口縁部の上面観は楕円形を呈しており、長径8cm、短径6cmである。長径部はやや高くなっている、注ぎ口の様相を呈している。最大径は胴部中央付近にあり直径16cmである。底部は欠損しているが、丸底と思われる。肩部の上部には1条の細い沈線が巡っている。短径部の両側には沈線の上に矩形の沈線文様がみられる。外面は丁寧なヘラナデで仕上げている。内面もヘラの横ナデで仕上げているが、輪積み部の痕跡が明瞭に残っている。茶褐色・黄褐色を呈しており、黒斑もある。焼成はあまり良くない。胎土は石英・白色石・雲母・黄色石などの細石を多く含んだ砂質土である。

#### 20. 17トレンチ (2×2m)

17トレンチは15トレンチの南側のサトウキビ畑に設定したが、赤土まで天地返しされており、遺物包含層の広がりは確認出来なかった。天地返しの深さは約50cmである。遺構・遺物とも発見されていない。

#### 21. 16トレンチ (2×5m)

16トレンチは15トレンチの東側15mの所に設定した。耕作土の下は搅乱土であり、赤土まで天地返しされていた。天地返しの深さは北側で約40cm、南側で約60cmである。15トレンチ付近の包含層の広がりは確認出来なかった。遺構・遺物とも発見されていない。

#### 22. 8トレンチ (2×5m)

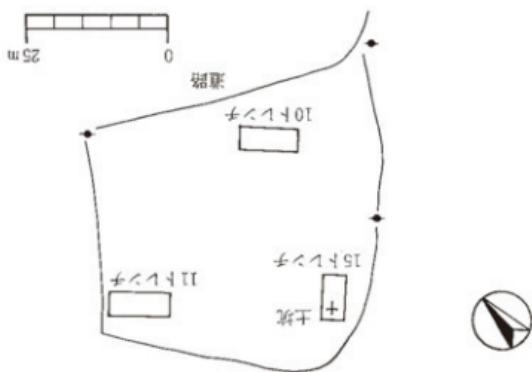
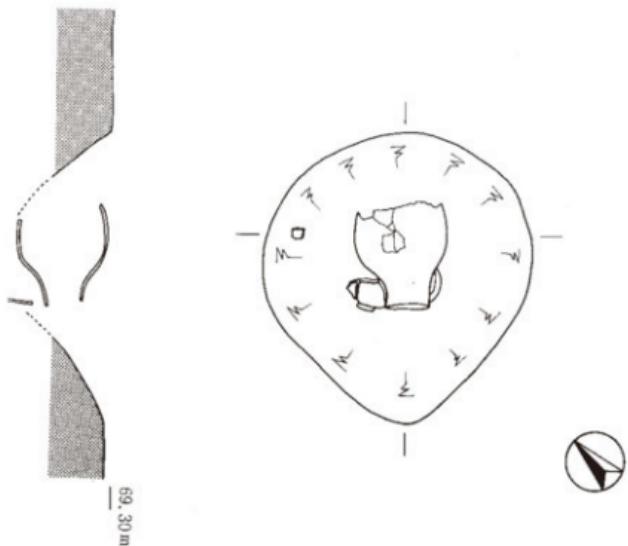
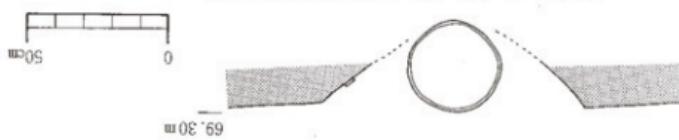
8トレンチは遺跡の東側で、谷よりのサトウキビ畑に設定した。8トレンチを20m南に

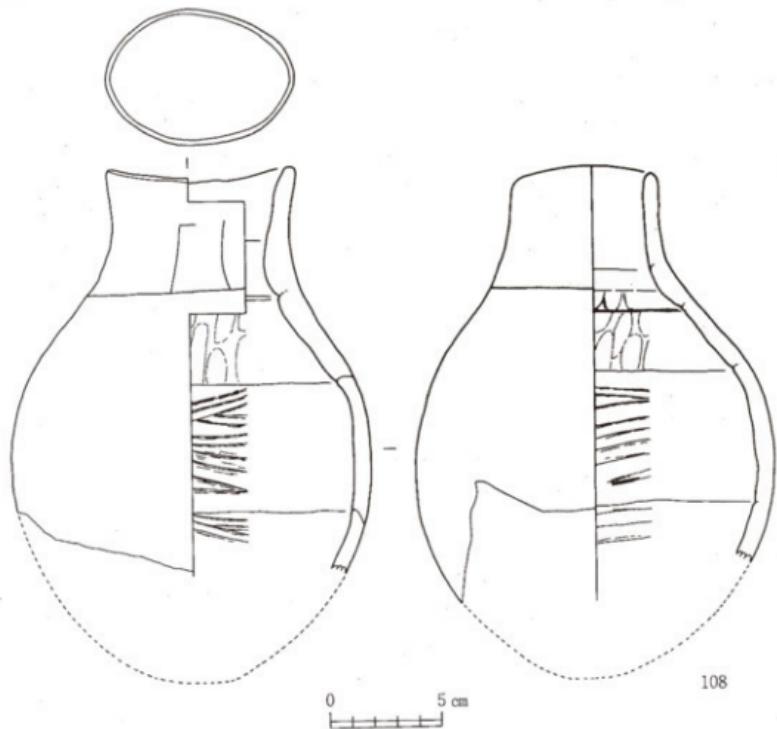
土坑中には完形の壺形土器が納められていた。

土坑は52×47cmの楕円形で、完形土器を取り上げた時点の深さが18cmであった。しかし取り上げてみるとその下にもまだ土器が入っており、掘り下げを続けたが、非常にもうくなってしまって取り上げても出来ない状態のため、今回はこれ以上掘り下げる

のを断念した。次回の全面調査

第17圖 10・11・15號之手印配置圖及土坑





第18図 土坑出土の土器

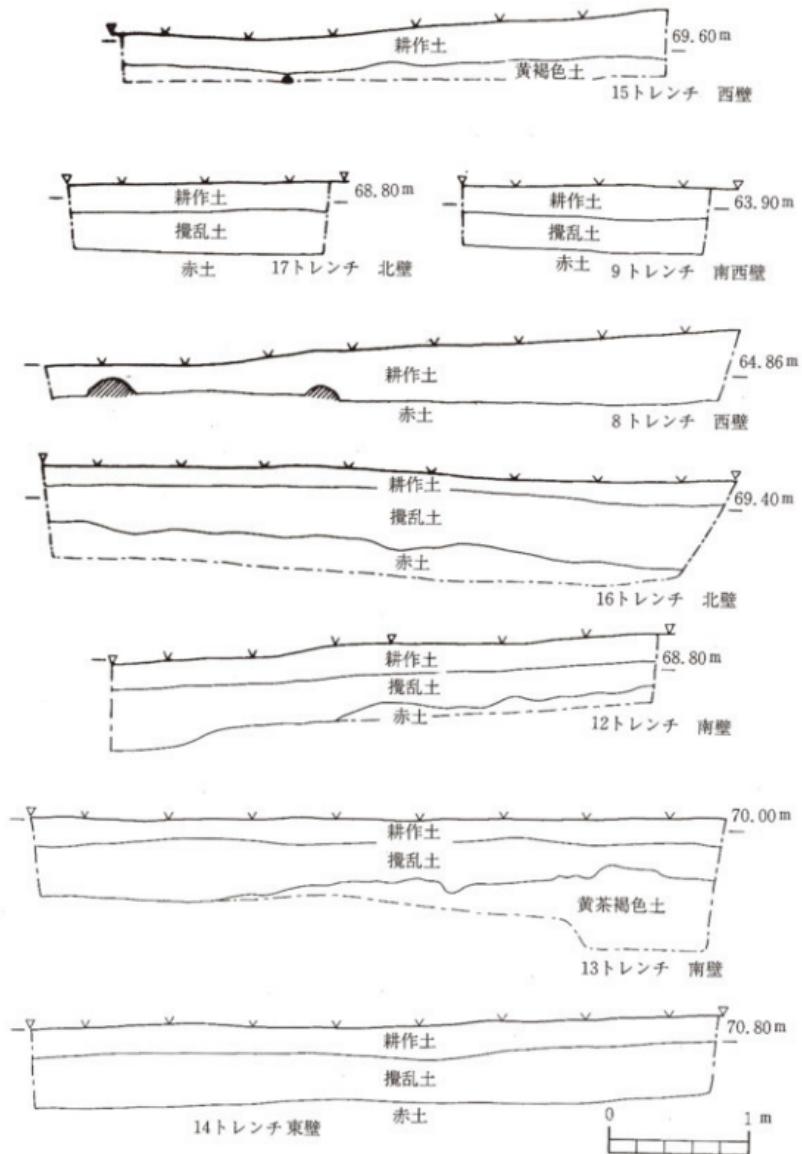
行くと谷に落ち、比高差は約10mである。トレンチを掘り下げるとき耕作土の下はすぐ赤土になっており、天地返しをされていた。深さは北側で約50cm、南側で約29cmである。遺構・遺物とも発見されていない。

23. 9トレンチ (2×2 m)

9トレンチは8トレンチと同じサトウキビ畑の北側に、約50m離して設定した。しかし同様に天地返しをされており、耕作土の下は搅乱土と珊瑚を多く含んだ赤土であった。天地返しの深さは約50cmである。遺構・遺物とも発見されていない。

24. 23トレンチ (2×2 m)

23トレンチは遺跡確認範囲の東の端にある。砂利敷の道路の表面を重機で除去したが、すぐ下は珊瑚の礫を多く含む層となっており、写真で記録した後埋め戻した。遺構・遺物とも発見されていない。



第19図 8トレンチ・9トレンチ・12~17トレンチ断面図

25. 12トレンチ (2×4 m)

12トレンチは遺跡の立地する舌状台地の奥にあたる。やはり天地返しをされており、耕作土の下は搅乱土・赤土であった。東側に谷が浅く伸びており、東に傾斜した地形であるため、トレンチ西側では深さ約40cmで赤土が出てきたが、東側は搅乱土が厚く、赤土まで約60cmであった。遺構・遺物とも発見されていない。

26. 13トレンチ (2×5 m)

(1)概要

13トレンチは12トレンチと道路を挟んで西側に設定した。周辺には遺物が少量散布しており、その中には黒曜石のチップも含まれていた。黒曜石が採集できたのは遺跡確認範囲内で13トレンチ周辺だけである。トレンチを掘り下げると耕作土・搅乱土が50~60cm堆積し、その下は黄茶褐色土層になっていた。黄茶褐色土層は赤いマンガン粒を含み褐色の斑点模様がある。トレンチ西側を約1m掘り下げたが、黄茶褐色土層は厚く堆積していた。

耕作土から搅乱土にかけて、多くの遺物が出土した。土器が107点、石器が3点である。

(2)遺物

①土器 (第16図106・107)

106は口縁部が内反し、波状となるものである。外面は低い段を呈しており、内面も端部近くがくぼんでいる。

107は口縁部近くがくぼんで段にみえる土器である。

106が明茶褐色、107が暗茶褐色を呈し、焼成はいずれも悪く、磨滅がひどい。106は黄色石・石英・白色石などの細石粒を多く含んだ砂質土、107は黄色石・石英・白色石など4mm大ほどの小石粒を多く含む割と粗い砂質土を用いている。

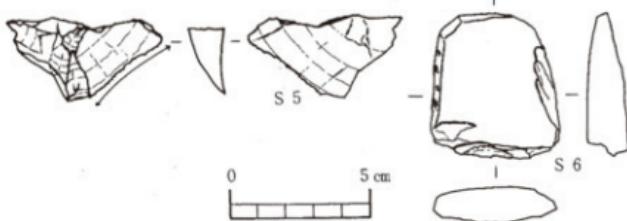
②石器 (第20図S 5・S 6)

S 5とS 6は表土から出土した。S 5はチャート製で、使用痕のある剝片である。やや厚みのある剝片であるが、鋭く割れた縁辺部を刃部として利用しており、細かく剥離された使用痕が観察される。S 6は磨製石斧の基部であると思われる。雲母片岩製である。

27. 14トレンチ (2×5 m)

14トレンチは13トレンチの西に25m離して設定した。耕作土の下は搅乱土が厚く、深さ約60cmまで天地返しをされていた。

遺構・遺物とも発見されていない。



第20図 13トレンチ出土の土器

## 28. 表面採集資料

土器・土製品・石器が表面で採集された。

### ①土器 (第21図109~129)

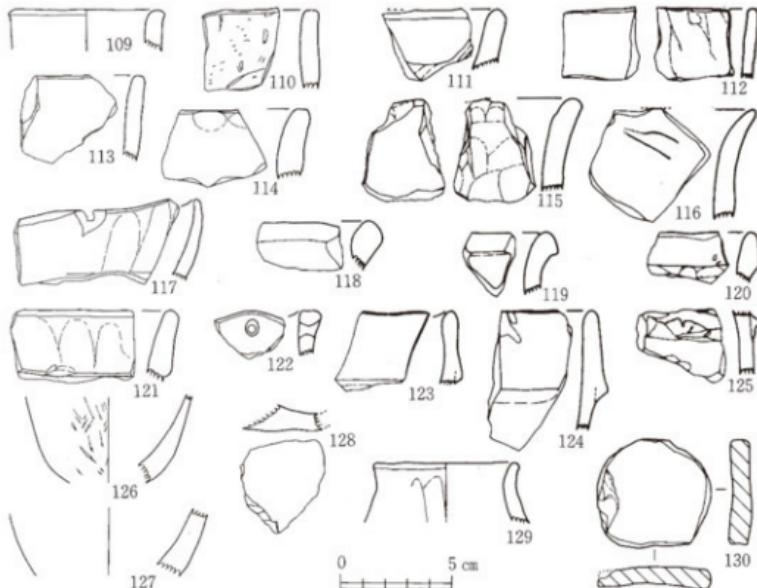
109~129は4トレンチ周辺で採集された土器である。

109~113はまっすぐ、あるいは外へ開きながら立ち上がるものである。109は直径7cmと小型で、縫部がやや外へふくらんでいる。110の外面はヘラによる斜方向ナデ、内面はヘラによる丁寧な横方向ナデで仕上げる。111の外面口縁端部には屈曲部がみられる。112は内外ともヘラナデであるが、外面は特に丁寧である。114~116はやや外反するが、116は特に外反度が強い。115は内外とも丁寧なヘラナデで、116もヘラナデで仕上げる。

117は波状となる口縁部で、突起部では縫部でやや内寄し薄くなっている。

118~122は口縁部がやや肥厚するものであるが、玉縁状となるもの(118)や、幅広いもの(121)などがある。121の外面はヘラナデで仕上げている。122は波状口縁で、突起部の下に直径6mmほどの孔がみられる。磨滅しているため、孔を穿ったのが焼成前なのか、焼成後なのかはっきりしないが、両面からの穿孔である。

123~125は貼付突帯のあるもので、123は波状口縁である。124の内面は粗い横ナデ、125は内外ともヘラによる丁寧な横ナデで仕上げる。



第21図 表面採集の土器

126～128は底部で、126・127は丸底、128は平底である。内外ともヘラによって丁寧にナデている。

129は口縁直径6.5cmの小さな壺形土器で、内外ともヘラナデで仕上げる。

胎土は黄色石・白色石・雲母などの微石を多く含む細かい粘土のものと、黄色石・石英・白色石・雲母などの細石の多いもの(113・118・128)、あるいは石英・白色石などの小石を多く含む砂質土(115)がある。色調は淡茶褐色・明茶褐色をしたものが多いが暗茶褐色(117・124)・黒褐色(125・126)・灰褐色(111・115)のものもある。焼成は概して不良であるが、良好なものも多い。

### ②土製品(第21図130)

130は直径約5cm、厚さ8mmの円盤形土製品であるが、全面的に磨滅しており、周辺を打ち欠いたあと加工したかどうかは不明である。淡茶褐色を呈し、焼成度は普通である。黄色石・石英・雲母・白色石などの細石を多く含む砂質土である。

### ③石器(第22図～第26図 S7～S27)

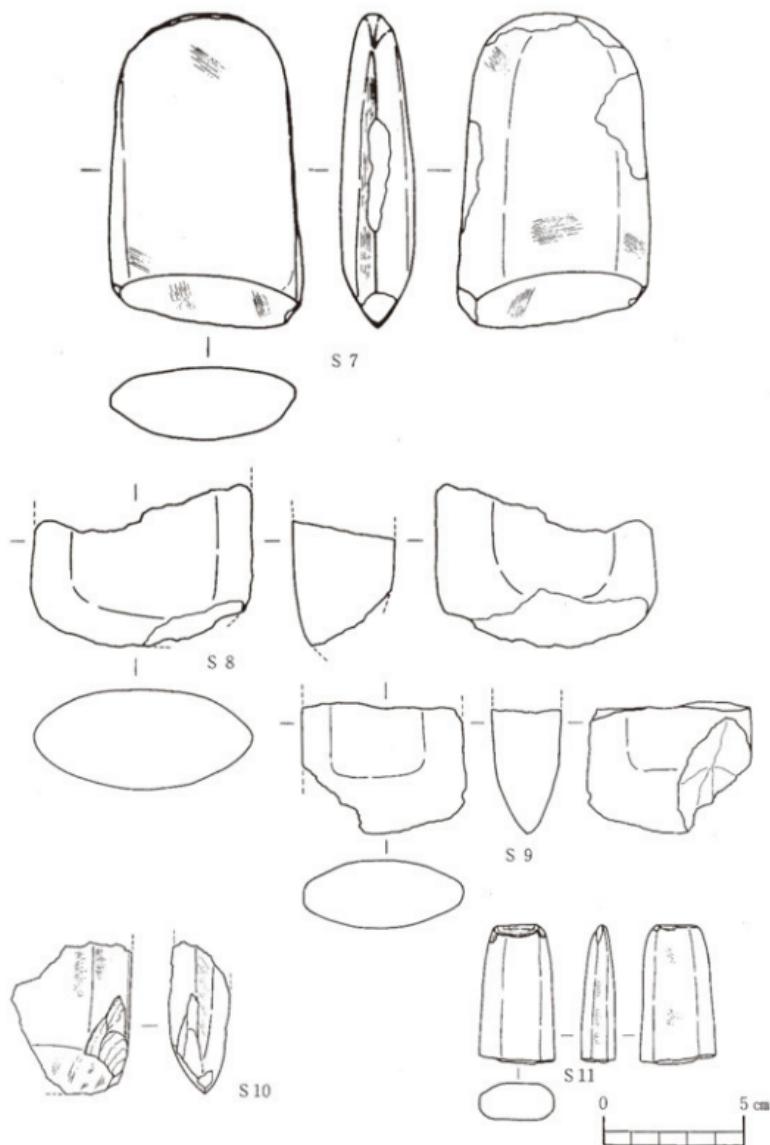
表採遺物の石器には磨製石斧5点、打製石斧2点、砥石1点、剝片1点、磨石類7点、クガニイシ2点、石皿3点がある。

S7は細粒裸岩製の磨製石斧である。長さ11.3cm、幅7cm、厚さ2.7cmの完形品である。全体を丁寧な研磨で仕上げており、刃部は両刃で、鋭い刃先を研ぎ出している。しかし刃部のつけ方が長軸に対して直角ではなく、斜めに角度を付けているところが特徴的である。S8はやや目の粗いホルンフェルス製の磨製石斧である。刃部側を残し、脇部で折れている。刃部は使用により大きく欠けている。幅8cm、厚さ3.6cmである。S9は角閃岩製の磨製石斧である。刃部は一部欠けているが、S7のように斜めに付けられていた可能性がある。幅5.9cm、厚さ2.5cmである。S10は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部破片であるが、よく研磨され表面は非常に滑らかである。刃先も鋭く研ぎ出されている。S11は蛇紋岩製の磨製石斧である。中途で折れているが、基部側と思われる。残存する長さは5cm、幅2.7cm、厚さ1.3cmで小型である。丁寧に研磨されており、側面も面取りされている。基部の上端にも剝離が観察される。

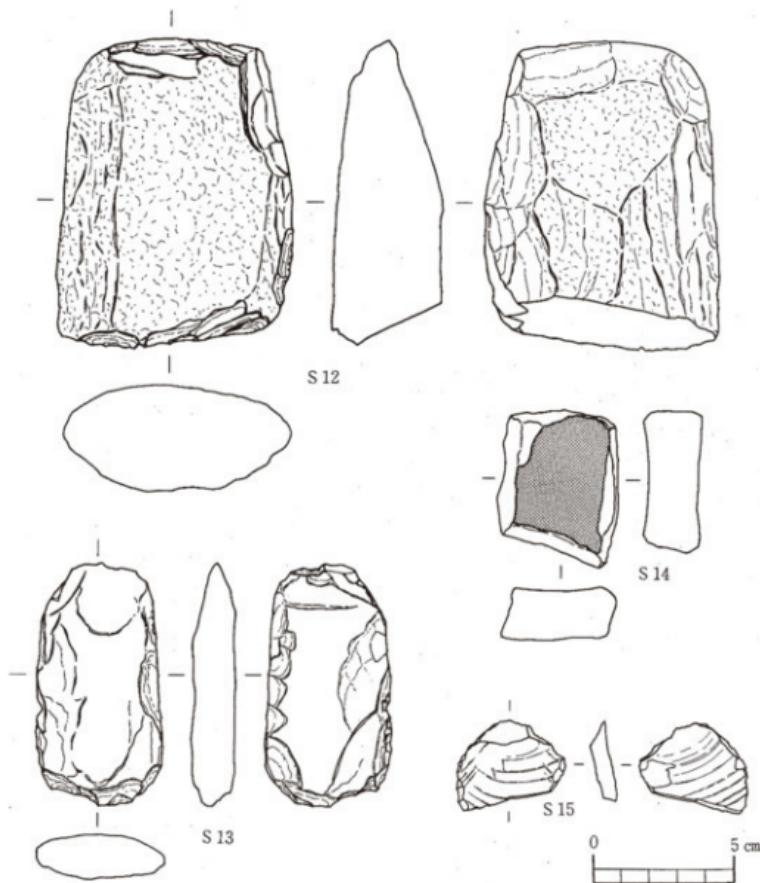
S12は打製石斧と考えられる。刃部側を欠損している。整形剝離の後、敲打で調整している。残存する長さは11.1cm、幅8.4cmで、緑色片岩製である。S13は小型の打製石斧である。刃部は使用によりつぶれている。長さ8.7cm、幅4.6cm、厚さ1.6cmの黒色片岩製である。

S14は砥石と考えられる。表面は磨滅して浅い凹みを生じている。破碎しており全体の形状は不明だが、薄く小型であると考えられるので、砥石とした。磨製石斧の砥石である可能性もある。石英斑岩製である。

S15は頁岩が熱変成したホルンフェルスの剝片である。縦3.3cm、横4cmで、やや横長の剝片で横剥ぎの技法とも考えられる。良質の石材であり、徳之島の剝岳(382m)付



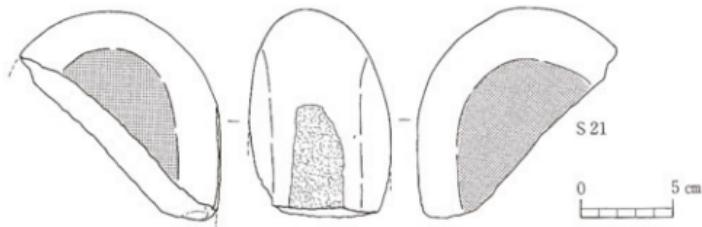
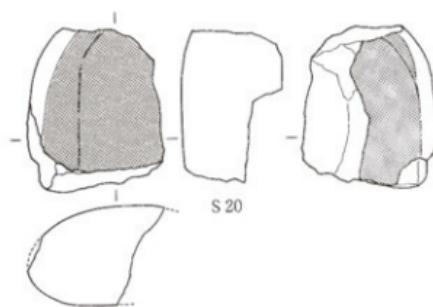
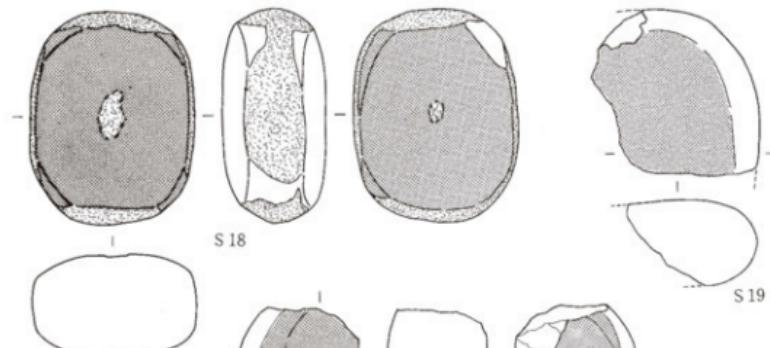
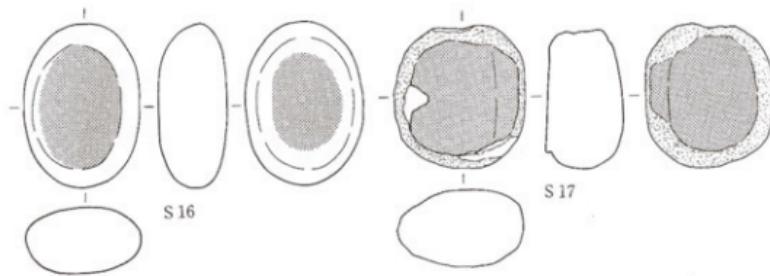
第22図 表面採集の石器(1)



第23図 表面採集の石器(2)

近に多く見られることがある。(註1)

S16～S22は磨石類である。従来は磨石・敲石・凹石とそれぞれ固有に呼称されていたが、一つの固体に複合した使用痕（磨痕、敲打痕、凹痕）を組み合わせて持つものが多いので、磨石類として一括した。S16は両面に磨痕、上下の頂部に浅い敲打痕が観察される。側面は使用されていない。長径8.9cm、短径6.3cm、厚さ3.7cmの小型の半花崗岩を利用しており、原材の形はそのまま残している。S17は両面に磨痕があり、側面には敲打痕が巡っている。特に上下の頂部は敲打でつぶれ、原材の形をとどめていない。長径は7.8cm



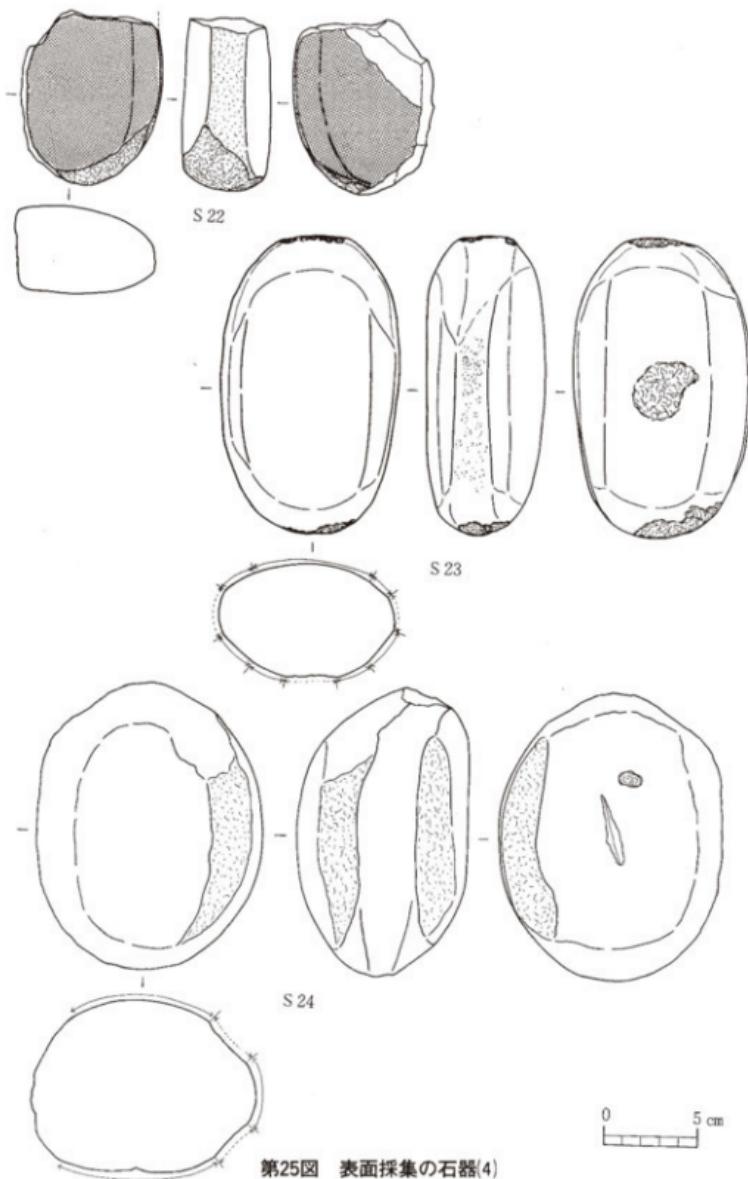
第24図 表面採集の石器(1)

厚さは4.3cmで、石材は砂岩である。S18は両面に磨痕と凹痕、側面には敲打痕と、3つの使用痕を兼ね備えるものである。凹痕は両面とも磨滅面の中央にあるが、大きさにはやや差がある。深さは浅い。側面は上下左右それぞれの方向で使用され、敲打によりつぶれて面が形成されている。長径11.6cm、短径8.9cm、厚さ5.6cmで、全体的に石けん形に近い形になっている。左右の敲打面は平坦であるが、上下の敲打面は斜めに持って使用されたらしく、やや山形に角度がついている。石材は砂岩である。S19は正面に磨痕が観察される。裏面は欠損しているためはっきりしない。側面は使用されていない。厚さは5.3cmで、石材は角閃ヒン岩である。S20も欠損しているが両面に磨痕が観察される。側面は使用されていない。厚さは5.5cmで、石材は角閃ヒン岩である。S21は両面に磨痕が観察され、側面には敲打痕が巡っている。右側面は特に著しい。破碎前の形状は長楕円形を呈すると思われ、大きさ、重量ともに大型である。現存する重さは920g、厚さは7.8cmで、角閃ヒン岩製である。S22は両面に磨痕が観察され、側面は敲打痕で面が形成されている。割れ口にも敲打痕が観察されるので、破碎後も使用されたと思われる。厚さは4.8cmで、石材は砂岩である。

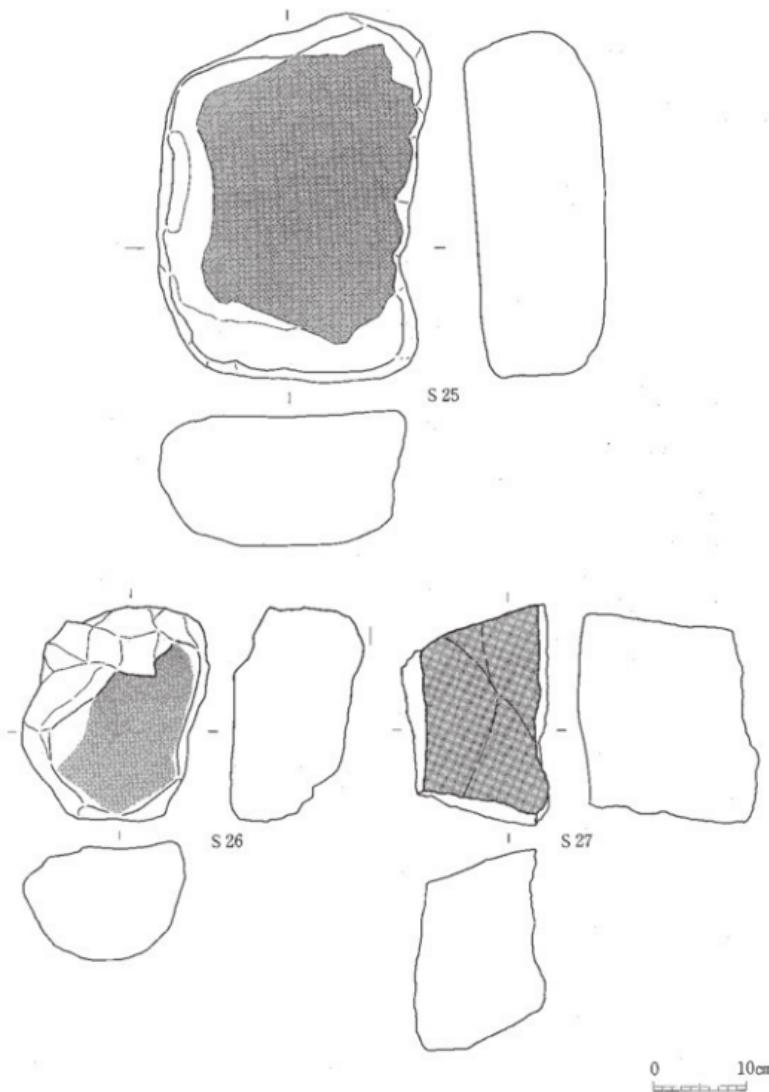
S23とS24はクガニイシと呼ばれる特殊石器である。S23は長径16cm、短径9.5cm、厚さ5.4cmの長楕円形の礫を利用している。重さは1.36kgある。両面を原材のカーブに沿って研磨しているが、特に側辺近くを強調して平坦化し、それによって両側の長辺部に突出した部分を作り出している。突出部の上面には敲打痕+磨痕が観察される。更に上下の頂部は敲打で使用されており、正面中央には凹痕もある。石材は花崗閃緑岩である。S24は長径15.3cm、短径12cm、厚さ9.2cmで、楕円形の重量のある礫を利用している。重さは2.32kgある。両面は研磨され、長辺の片側に作り出された部分がある。しかし作出方法が異なっており、S23は研磨で作り出していたのに対し、S24は側辺近くを三日月形に敲打し、くぼませることによって突出部を作り出している。突出部の上面は滑らかである。石材は花崗閃緑岩である。

S25～S27は石皿である。S25は厚みのある大型の礫を利用し、上面は磨滅により浅くくぼんでいる。風化している部分もあるが、滑らかで光沢のある面が観察される。裏面は使用されていない。全体は大まかに敲打で整形されている。石材は花崗斑岩で、長さ39.6cm、幅29.5cm、長さ14.2cmで、重さは29kgを計る。S26も上面が磨滅してくぼんでおり、手前に浅い注ぎ口を持つ。長さ23.2cm、幅20.5cm、厚さ13cmで、重さは7.42kgである。石材は砂岩である。S27は破碎しており全体の形状は不明であるが、上面が一面滑らかになっている。その中に特に磨滅した面が切り合っている。厚みのある礫であり、破碎する前はかなり大型の石皿であったと思われる。現存する長さは23.8cm、幅16cm、厚さ20cmで、重さは11.15kgである。石材は花崗斑岩である。

(註1) 玉龍高校成尾英仁氏の御教示



第25図 表面採集の石器(4)



第26図 表面採集の石器(5)

### 第3節 今後の措置

確認調査の結果、第27図の網かけの部分について、遺物包含層が残存していることが確認された。その2か所の部分については、現状保存されることが望ましい。



第27図 包含層残存区域

## 第Ⅳ章　まとめにかえて

第Ⅱ章でも紹介したように、伊仙町は奄美諸島の中でも遺跡の多い所として知られている。ところが、遺跡の立地を見てみると、そのほとんどは洞穴あるいは岩陰にあることが多く、今回のように開地の遺跡は少ない。その理由としては陸上珊瑚礁の上に堆積した土が薄く、畑として開墾された時、その土質からして天地返しが必要となるため、多くの畑でこの作業がされることが考えられる。今回の調査において多くの畑でこの天地返し作業がされており、その残存状況はかなり悪かった。そうした中で2か所において包含層の残存が確認された。

ひとつは4トレンチを中心とする約500m<sup>2</sup>の範囲で、この周辺では耕作土上にも多くの土器・石器が散布していたことから、元来はもう少し範囲が広かったものと思われる。調査範囲の中では整穴住居跡などの遺構が発見されず、包含層の調査もほとんど出来なかつたため、細かい観察は不可能であった。しかし、包含層の調査がされれば、いくらか分析できる資料が得られるかもしれない。今後の調査を待ちたい。

あとひとつは11トレンチを中心とする領域であるが、ここでは包含層の残存度が悪く溝状に残っているだけだった。しかし、サトウキビ畑のため調査ができなかつた西側部分には包含層の広がっている可能性がある。また15トレンチにおいて、水注形の口縁をもつ壺形土器が出土地した。これは円形土坑に斜位の状態で検出され、その下にもあと1個体分の土器があった。つまり、2個の土器が重なる形で埋納されていた。今回は土器の保存度が悪かったことなどから掘り下げを中断したため、これらがどのように重なっているのか、下にある土器はどのような形態なのかをることはできなかつた。このような出土状況は南島では初めての例であり、これが住居に伴うものか、祭祀に関するものかなど不明であり、その性格等については今後の出土例を待ちたい。

ここから出ている土器は大半が無文で、深鉢形の土器と、壺形の土器、鉢形の土器とに分かれる。深鉢形の土器は口縁部が玉縁状を呈するもの、幅広いかまぼこ状の突帯となるもの、やや外反し頸部付近に三角突帯の付されるものの3種類に大別できる。

奄美諸島周辺の土器は河口貞徳氏や高宮廣衛氏らによって分類・編年がされており、それによると玉縁状を呈するものは宇宿上層式・宇佐浜式土器、かまぼこ状突帯となるものはカヤウチパンタ式土器、外反するものは仲原式土器と呼ばれている。宇宿上層式土器については上城遺跡の報告書で堂込秀人氏が整理しているように、縄文時代晩期に位置付ける考え方と、弥生時代中期頃に位置付ける考え方とがある。仲原式土器については弥生時代に位置付けられている。当遺跡では包含層の掘り下げをやっていないため、これらの前後関係あるいは共伴関係を細かく分析できていない。これらの土器は今回の調査では混在した状態で出土しているが、先に記したように口縁部が3種類に分けられるだけでなく、底部も尖底、丸底あるいは平底に大別できる。こうした在り方からすれば、同時期のものとすることは無理がある。

一方、15トレンチにおいて出土した壺形土器は全形のうかがえるものとして注目される。この土器にはほとんど文様がないが、頸部に沈線が巡り、そこから上に向かって2か所に矩形の突出部がみられる。水注形をした壺形の土器は与論町上城遺跡や沖縄諸島でも出土しているが、上城遺跡のものは無文のものと、口縁部から頸部にかけて細沈線があるものとがある。上城遺跡では宇佐浜式土器・仲原式土器と共に伴しており、報告書ではこの壺形土器をもとに2時期に分離できる可能性があることを指摘している。当遺跡のものは文様がほとんどなくなっていること、上城遺跡の壺形土器と比較すれば退化した傾向がうかがえる。やや時代的に下るものであろう。今後、壺形土器においても無文なのか、有文なのか、あるいは器形の違いなどを検討することによって細分・編年化が可能となると思われる。

また、鉢形土器の存在も南島でのセット関係を考えるうえには重要である。これらは当時の食生活、生業等を考えるうえに参考とせねばならない要素であろう。

こうした無文土器とともに出土した有文土器（54・87）は喜念I式土器であり、これをいずれかの土器との共存と考えれば、当遺跡の始まりは繩文時代晩期にあるといえよう。

下限については今後、土器の編年によってはっきりするだろうが、弥生時代にはいったとしても前期を下らない時期にとどまるのではなかろうか。

石器もいろいろな種類が出ている。これらも、この遺跡の時期決定、生業等を考える時に示唆を与える材料となろう。

#### 参考文献

堂込秀人・吉永正史『上城跡・上城遺跡』（『与論町埋蔵文化財発掘調査報告書』1）1990年  
与論町教育委員会

# 図版



海側から遺跡全景を望む



16 レンチ付近から南方向を望む



10トレンチ付近から南西方向を望む

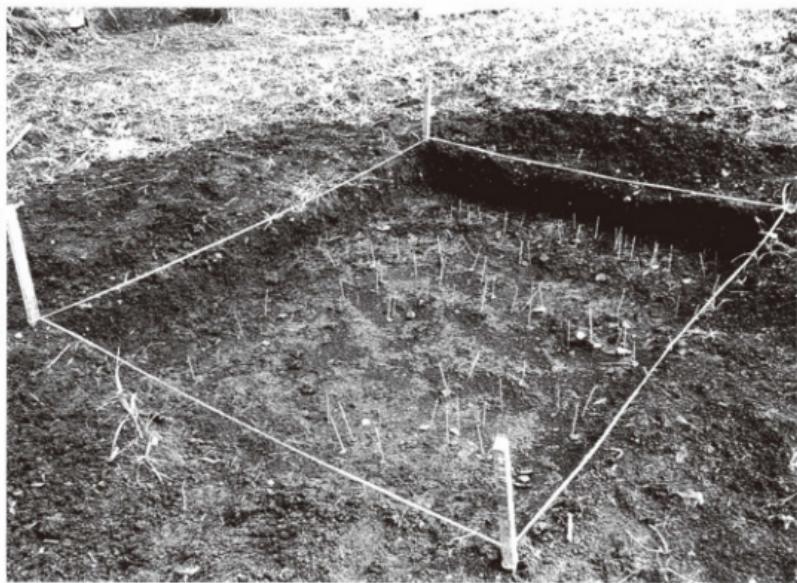


5～7トレンチ, 20トレンチ, 21トレンチ付近

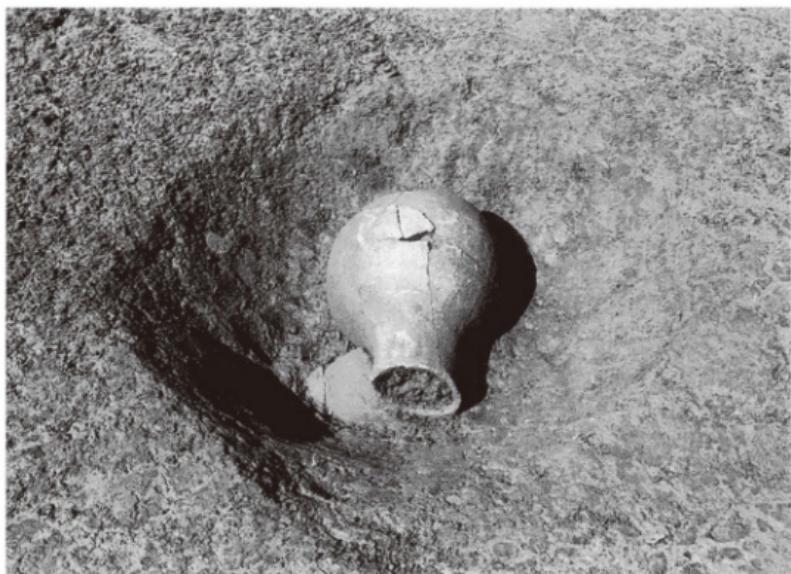


上 北西から  
中左 西壁  
中右 磨製石斧出土状況  
下 遺物出土状況

図版 4  
20トレンチ出土状況など

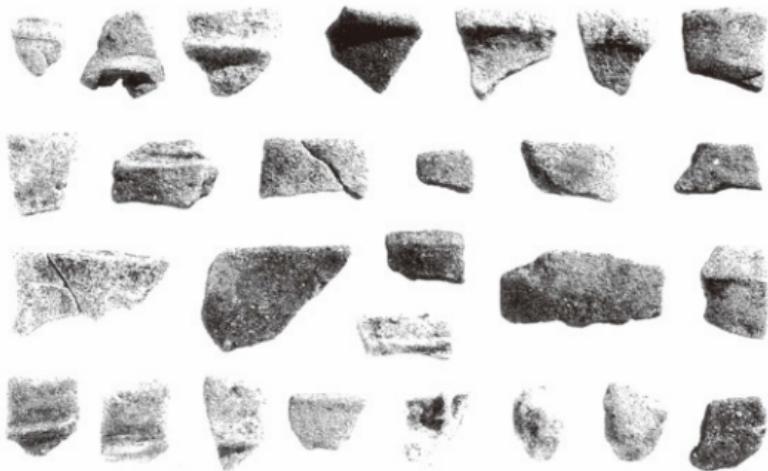


上 20トレンチ出土状況  
中左 20トレンチ出土状況  
中右 調査担当者  
下 8トレンチ（南から）



上 南西から  
中左 西から  
中右 土坑の下部  
下 15トレンチ（西から）

図版6 3トレンチ・4トレンチ出土の土器



3トレンチ・4トレンチ出土の土器

左上から右へ1・2……

右下27

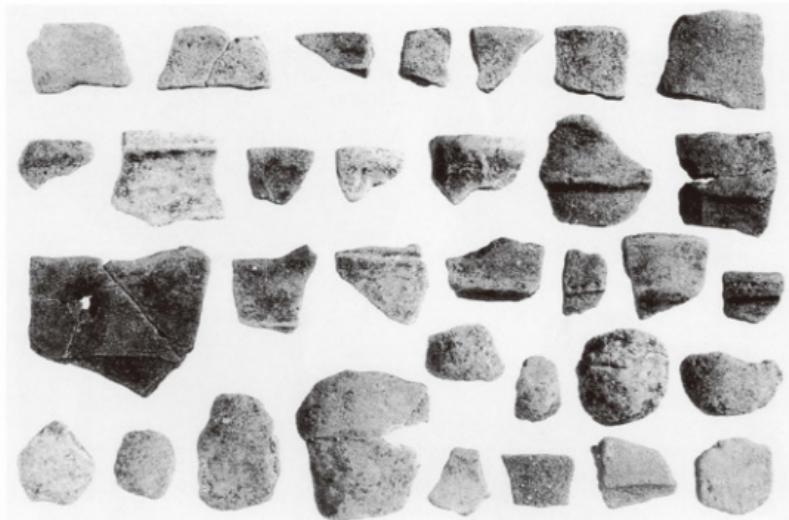


4トレンチ出土の土器

左上から右へ28・29……

右下59

図版7 5トレンチ・表面採集の土器



5トレンチ出土の土器

左上から右へ67・68……

右下99

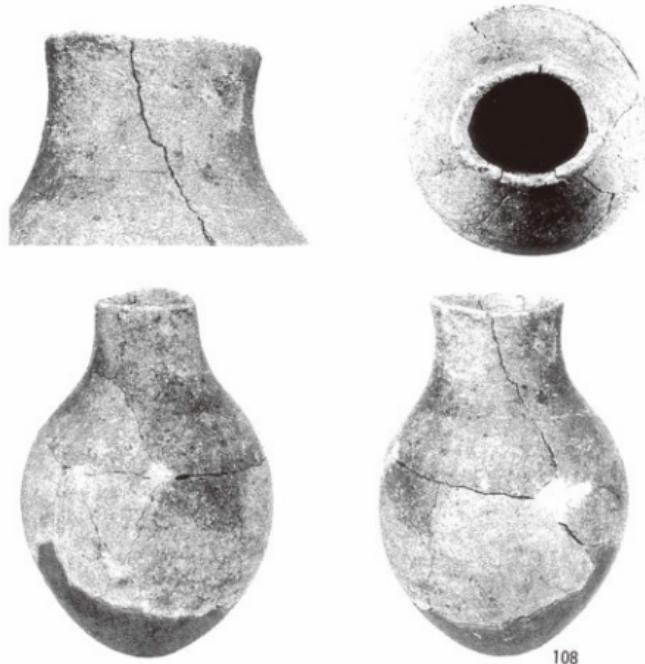


表面採集の土器

左上から右へ109・110……

右下130

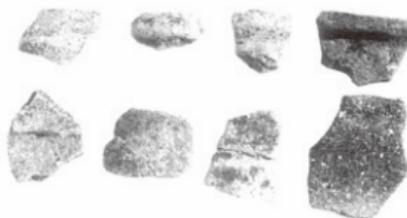
図版 8  
土坑・10・13・22トレンチ出土の土器



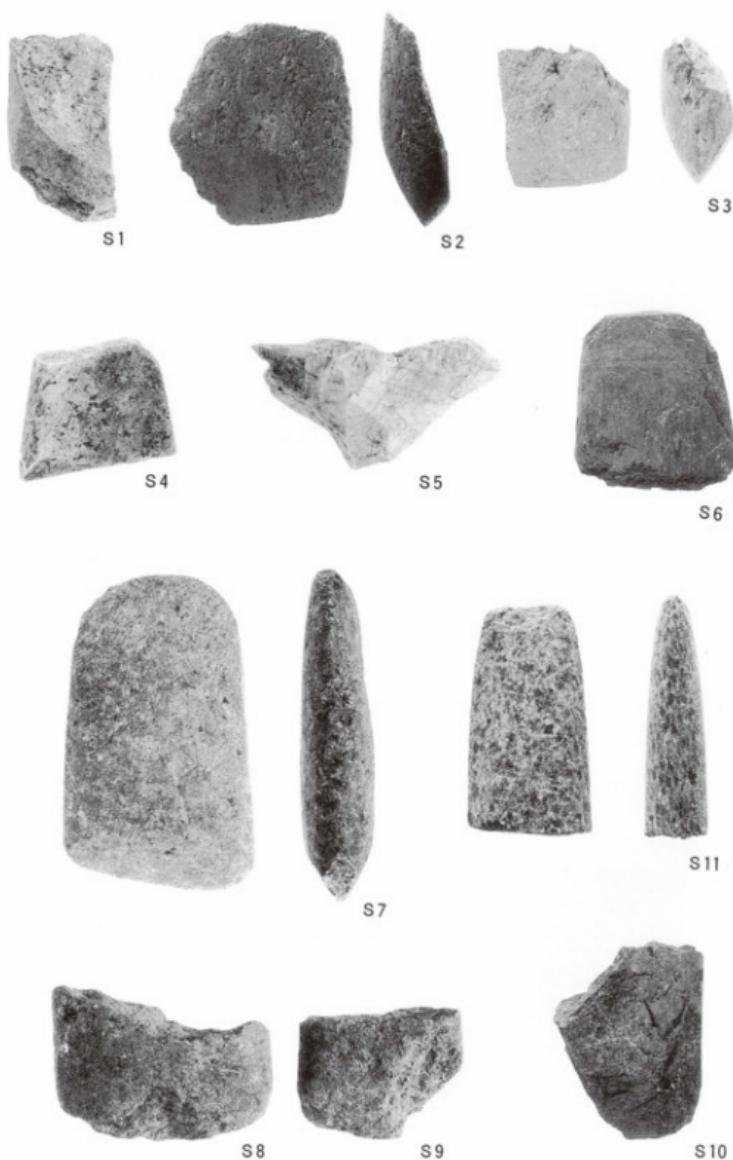
22トレンチの土器  
左上から右へ60・61……  
右下66



10・13トレンチの土器  
左上から右へ100・101……  
右下107



圖版 9 石器 (1)



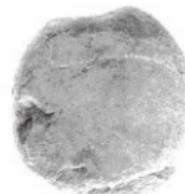
図版  
10 石器 (2)



S 13



S 15



S 17



S 16



S 19



S 18



S 20

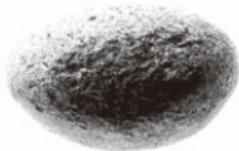


図版 11 石器 (3)





S 23



S 24

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

カメコ遺跡

発行日 1993年3月20日  
発 行 伊仙町教育委員会  
〒891-82  
鹿児島県大島郡伊仙町伊仙2293-1  
TEL 0997-86-3188  
印 刷 有限会社 朝 日 印 刷  
〒890 鹿児島市上荒田854-1  
TEL 0992-51-2191